

まえがき

本報告書は2004年3月8日から3月22日までオーストラリア・クィーンズランド州ブリスベン市で行った研修の報告である。

年少者日本語教育研究室では、これまで多文化主義を国是とするオーストラリアの言語教育政策について研究を続けてきた。特に、移民の子どもたちを対象に行われている第2言語としての英語教育（ESL）は、「日本語を第一言語としない子どもたち」が増加している日本における年少者日本語教育を考えるうえで非常に参考になる教育実践である。またオーストラリアにおける初等中等教育レベルの日本語教育（JFL）はアジア諸国で盛んになっている同レベルの日本語教育を考えるうえで参照点となる教育実践と言える。そのような意味で、年少者日本語教育研究室では実際の学校現場を視察することが極めて重要であると考え、今回の研修を企画した。

そのため、今回の研修では、研修に参加した院生が、ESLおよびの授業に直接参加して、実態を把握するという方法をとった。この報告書に収められたレポートに、そのような視点からの考察が含まれているのは、そのためである。また、われわれはオーストラリアのESL教育がそのまま日本に適用できるとは思っていないし、オーストラリアの日本語教育がそのまま他国に適用できるとも思っていない。したがって、本報告書も報告会もタイトルを「オーストラリアのESLおよびJFLを検証する」とした。

なお、本研修では学校訪問に関してクィーンズランド州教育省から経費を請求された。その一部は日本語教育研究科より支出していただいた。記して、感謝を申し上げる。

2004年4月

年少者日本語教育研究室
川上 郁雄

グリーンスロープス小学校 Greenslopes State School (訪問 1 回目)

訪問日 3月9日(月)

校舎中の窓が開け放たれ、35度の外気温とはうらはらに爽やかな風が通りぬける学校、グリーンスロープス。1学年1クラスほどのアットホームな学校である。

校長先生の温かな笑顔に迎えられ、ESLの午前クラスすべてに参加、午後は1時間ほどもESL担当の先生と話をする機会を与えていただいた。以下、見学したこと、ESLの先生の話をもとめる。

<学校の概要>

児童の人数…189人(1年～7年生まで)

ESL児童の人数…約1/4(40人～50人)

先生の人数…約20人(そのうち13人がESL関係の先生)

現在実施しているLOTEプログラム…イタリア語のみ(7年間)

<ESLクラスの概要>

ESL児童の人数…全校児童の約1/4(40人～50人)

出身国…スーダンなどアフリカ、アフガニスタン、トルコ

※内戦地帯からの難民を受け入れている。情勢によって変わってくる。

教師…1名(ボランティアが1名補助に付くことがある。)

ESLクラス…7名～10名ほどを1クラスとして活動する。

学年が揃えられないので、異学年同士のクラスとなっている。

滞在期間がばらばらである。(来豪1日～半年の子ども達が同じクラス)

<授業の内容>

朝～モーニングティー

- ① 自己紹介 My name is ; I come from ; I can speak ; I am in year ; At school I like
- ② 絵本を読む(BIG BOOK “HANDA’S SURPRISE”)
※文章を指して読み聞かす。 ※文章を隠して想像させる。
- ③ 単語と絵を使ったゲーム(カルタ取りの要領)
- ④ ゲーム(What’s missing?) (果物を数種類用意し、子どもが目を閉じている間に1個隠す。なくなった果物が何かをあてるゲーム。)
- ⑤ 見学者とともに4グループに分かれてカードゲーム

モーニングティー～お昼

- ① 個人で絵本の黙読

絵本は、レベル分けされたものが多彩に揃っている。子どもは自分にあったレベルの箱から絵本を選ぶことができる。

- ② 絵本を読む

見学者に子どもが絵本を読んでもらった。

③ ゲーム

- アクションゲーム(全員) ・教師が動詞カード(絵)を見せて、児童が単語を答える。
- ・一人の児童がアクションをして、他の児童があてる。

双六、ノート作り、PC、プリントの各グループに分かれて活動

<バンドスケールについて>

- ・ 4技能すべてが3になるまでは、ESL クラスに参加させる。
- ・ ESL 担当者が当該児童をよく観察し、納得した上でスケールにチェックをする。
- ・ 当該児童においてチェック項目が異レベル間で重なっている場合は、重要な項目の方を優先する。

<担任(在籍クラス)との連携について>

- ・ 連携は難しい。しかし、ESL の授業で何か問題が起こったとき、まずその子の両親と話し合い、その後教職員で話し合いをする。ES 担当、担任、その他の先生とで問題解決にあたる。
- ・ 学年によって人数にばらつきがあるために、学年でクラスを作ることができない。そのため、在籍学級の授業とつなげることが難しい。

<ESL 児童について>

- ・ ESL 児童同士でかたまっている。
- ・ 学校に行くことが初めての子どももいる。
- ・ 難民向けの短期間(1ヶ月)の宿泊施設が近くにあるため、この小学校に通ってきている。1ヶ月たつとそこを出なければならぬので学校も移動しなければならない。そのため、児童の持つ文化的背景を含め、児童理解が難しい。
- ・ 2年間で63名が ESL クラスで学んだが、そのうち半数は別の学校へ移動した。卒業生は、ミルペラ高校へも通っている。

— 報告者の感想および考察 —

オーストラリアが難民を多く受け入れているということは、すでに知ってはいたつもりであったが、今回の見学で現状を見ることができ、いい意味でショックを受けた。

アフリカの内戦地域から来た難民の子達の中には、公的な教育を受けた経験のない子もいた。そのため、この学校の ESL 教師は、語学教師であると同時に、集団生活、マナー、ルールなども教え、支援する存在であり、また、ESL 教室は ESL 児童達が安心できる場所として存在していた。ESL 教室には、教室の外で問題が起こった子ども達が駆け込んで来る。言葉だけでなく、新しい場所に馴染むことのできない子ども達の心の拠り所になっているのである。

しかし、担当の先生は決して甘やかさない。おそらく見学者がいたということもあつたのだろうが、その時先生は、「当番の先生に言いなさい。」「担任の先生は？」と返した。いつでも ESL 教室には、その子のためにならないという考えなのであろう。ESL 教師や

ESL 児童生徒同士だけでなく、子どもの社会、学校という狭い社会であっても多くの人と接する中で子どもは成長することができる。成長というのは、言語学習だけに限らない。ESL 教師の温かい教育観を見た気がした。

バンドスケールで、4 技能すべてがレベル 3 に達すると、在籍クラスに入って一緒に授業をすることになるという。ESL クラスと在籍クラス、ESL 教師と担任教師、この 2 つの関係性の難しさがここにもあった。ESL 児童が 1/4 ほどもいる学校であっても、教師によっては ESL 教育への理解が得られない場合もあるという。特に、当該児童の英語力をバンドスケールを使用して測るに関しては、担任教師では難しいとの話があった。多くの英語ネイティブ児童の中に入れてしまうことで、ESL 児童は「埋もれて」しまい、ESL 児童の英語力や背景に考慮した授業はなかなか行われないうだ。また、ESL 教室側も、人数が揃わなかったり、時間に制限されて、在籍クラスの進度に合わせた学年別の支援を行うことができないという実態がある。

このことは、ESL 教育に関するだけでなく、「教育」全般の問題とも繋がることである。多人数クラスの支援目標をどこに置くか、下に設定すれば、上が成長しないし、上に設定すれば下がついて来られない、中間がいいかという、上や下に対しての手厚い補助が必要となる。上や下という表現は適切ではないと思うが、多人数のクラスの場合そのようにさまざまな子どもが含まれることは否めない。

しかし、日本の状況と比べると、オーストラリアの ESL 教育は本当に豊かで多くの人に認められている。ESL 教師の経験も豊富でありその教育姿勢や知識は大変参考になるものであった。日本の JSL 教育にもぜひ生かしていきたいものである。

報告者 小池愛

グリーンスロープス小学校 Greenslopes State School (訪問 2 回目)

訪問日 3月15日(月)

<前半の授業>

- ・ 身近な単語の絵カードをみせ児童に見せ、単語を発音させていた。メインストリームでの生活を意識したような単語 (**bin, heater, cupboard, pencil** など) で、各単語について簡単な質問もしていた。
- ・ 今度はスペルだけのカードをみせて、そのカードをそのものの所に貼る活動をしていた (**computer, window, door** など)。
- ・ 赤青黄色などの色の確認をし、4グループにわかれ黒い紙と色つきセロファンで蝶々を作成 (写真3)。どの色が好きかを聞いたり、色の確認をしながら作業を進めた。終わったら、蝶に作った子どもの名前を書き、窓に飾られた。
- ・ **What did you do on the weekend?** という質問をし、例として院生がしたことを話した。その後一人の児童をあてて、その児童にモデリングで文を4つくらい上げてもらった。
- ・ その後4グループに分かれて週末の活動についての絵を描いたり、文を作る子は文を考え、書いた。レベルによって先生が文を書いてそれをコピーさせたりした (**I went to the park, I had a swing at the park** など)。

<後半の授業>

- ・ 後半は読書を習慣付けていて、児童もそれをするとても落ち着いているようだった。
- ・ それぞれのレベルにあった本と単語カードを与えられ、黙読をし、その後児童が院生に読み聞かせてくれる。その後、児童が選んだ本を院生が読み聞かせる。児童の大好きな本があり、それをうれしそうに読んでいた。すでに暗記してしまっているよう。
- ・ 先生が児童を床に座らせ、パソコンを使ってレインボーの歌を歌う。児童はうれしそうに歌を歌った。その後、レインボーフィッシュの本を先生がみんなに読み聞かせる。その際、児童に本の絵を示し様々な質問を投げかけたり、魚の気持ちについてのことを意識的に語っていた。そして、そのあとの **I feel -----** に関する活動へつなげるよう意識していた。
- ・ 白い顔に目鼻を書き込み、その気持ちを **I feel happy when_____** の文にする。目などのパーツを選ぶ際、パーツごとに書いてある文字が読めず、**happy** の目を選べないでいる児童もいた。
- ・ ビンゴ。各カードに書いてあるものの名前を確認してスタート。みんなで助け合いながらやっていた。ビンゴであがりかたのときに **1st, 2nd** など助数詞の読み方を確認。あがったらお菓子が与えられる。
- ・ 先生と児童から院生へお礼とプレゼントをいただく。

— 報告者の感想および考察 —

前半の授業は数学のクラスに行っている子どももいたので、はじめはクラスに6人くらいだった。数学の授業が終わると児童がちらほら入ってきた。そして入ってきた児童は自然に ESL の授業に溶け込んだ。各活動で先生は、児童が常に静かにすわって手を上げさせられてから答えることを徹底していた。社会的なマナーなどもしっかり教えていた。しかしだからといって、児童の発言が減るわけではなく、児童が自ら言葉を発していくことが意識されていた。片付けも自分で出したごみは自分で捨て、使ったはさみはあった場所に戻すことを徹底していた。このように、授業以外のしつけの面での教育も上手に行われていた。児童へのしつけと自発性という、この一見相反する行いをバランスよく教えていることに先生の力量を感じた。また、「これをやったらみんなの好きなビンゴをやろう」というように児童の関心を促し、授業全体にメリハリがあった。しかし、授業の流れを意識しすぎているわけではなく、タスクを終えていない児童にはそのタスクが終わるまでせかさずに児童のペースを尊重していた。そして授業の最後に私たちボランティアにプレゼントをくれるというような、どの状況においても先生は子児童が学べる機会を存分に活用していた。どうして教育を経験していなかった子どもたちを先生がここまで上手く操ることができるのか不思議でならなかった。一回目の訪問の際に、ESL 授業に参加したばかりの子どもがいたが、二回目の訪問の際にその子どもは明らかに語彙が増えていたという。日本での年少者日本語教育において、授業の流れや子どもへの指導の仕方について非常に参考にしたい授業だった。

報告者 坂田麗子

ミルペラ高校 Milpera State High School

訪問日 3月11日(水)

<学校概要－教頭・校長先生のお話から－>

Milpera State High School。この聞きなれない'Milpera'という言葉はアボリジニの言葉で「兄弟姉妹たちが出会う場所」という意味だそうだ。**Milpera** 高校はその名前の通り、さまざまな言語、文化、経験を持った生徒が集まり、ともに学ぶ場所である。

Milpera State High School はクイーンズランド州唯一の ESL 専門の High school で、メインストリームの Secondary school へ編入するために必要な英語教育やその他必要なサービス、教育を行う。10 週間 1 ユニットのコースが初級から中上級まで 6 つ用意され、毎週生徒の入学を受け入れ、5 週間ごとに生徒が巣立っていく。そのため生徒の人数は特定できないが、大体 160 名ほどの生徒が在籍し、1 年間では約 500 人の生徒がミルペラに通う。生徒の在籍期間はレベル、進度により異なり、約半年から 1 年、場合によっては数年かかって Milpera を去る。

Milpera の生徒の出身は国際情勢の影響を受け、毎年変わる。以前は 3 分の 2 が移民の子どもたちだったが、最近では 3 分の 2 が戦争や政治的理由からやむを得ず祖国を離れオーストラリアにやってきた子どもたちだそうだ。私たちが訪問したときは、スーダン、ソマリア、エチオピア、リベリア、アフガニスタン、イランなどの子どもたちが多かった。難民キャンプで学齢期をすごした子どもたちの中には、母語での読み書き、あるいは「学校教育」そのものを経験しないまま 10 代の後半をオーストラリアで過ごすというケースも多い。また両親や片親を戦争で亡くし、子どもたちだけでオーストラリアに避難してきた子どもたちも少なくない。このような生徒には、オーストラリアのメインストリームの学校文化への「適応指導」(座って話を聞く、勉強する態度を身につける、学校のルールに慣れる、等)、読み書き、四則計算の指導はもちろん、戦争で負った心の傷のケアも必要だ。最近ではアートや音楽を用いて心のケアをするアート・セラピストのスタッフが常駐している。難民の子どもたちのほかは、永住ビザを取得した移民の子どもたち、親の仕事の関係で一時居住ビザや学生ビザで渡豪したインターナショナル・ステューデントが在籍する。難民の子どもと永住ビザまたはオーストラリア市民権を持つ生徒は学費が免除されるが、一時居住ビザおよび学生ビザの生徒は学費をクイーンズランド州に支払わなければならない。

Milpera では、クイーンズランド州のカリキュラムに基づき English/SOSE (Studies of Society and Environment－総合的な社会科の教科領域)、Math、Science、HPE (保健体育)、情報技術、コンピュータ・テクノロジーなどの教科領域を扱うが、焦点は高校で必要なアカデミック・イングリッシュの指導に当てている。Milpera には大学院で ESL を専攻した教師も多くいるほか、バイリンガル、多文化背景のスタッフが勤務している。私たちが訪れたときはアフリカ系の言語を母語とするボランティアが目立った。Milpera 高校では

生徒のコミュニティの人（生徒の文化を共有する人）を呼んで、自分たちの子どもの見方が一面的になっていないか意見を求めている。これはオーストラリアの文化の中ではどうという視点で判断されるのかを子どもたちに伝えるためだそうだ。

多くのボランティアに支えられている点は **Milpera** 高校の特色のひとつといえるだろう。**Milpera** 高校には週に約 **50** 名のボランティアが訪れ、**Science**、リーディング・ライティング、**Math** などさまざまな領域で生徒のフォローに当たる。ボランティアには定年後の元教師や、大学の教授も含まれ、カリキュラム開発や若手ボランティアの指導などにも積極的に関わっている。また多数のボランティアの存在は、**1 対 1** の「取り出し」形式の読み書き指導を可能にしている。クラス形式の授業でも、教員一人につき、ほぼ **1** 人か **2** 人のボランティアが入り込み、生徒の質問に答えたり、補足説明をしたり、授業に集中させたりといったフォローを行っている。生徒の母語、ニーズにより、バイリンガル・スタッフを採用するそうだが、上で述べたように生徒の母語は刻々と変わるため、彼らを常勤スタッフとして雇うことはできない。他のボランティアも同様に仕事の責任や負担に見合った報酬を提供できないジレンマが校長先生のお話から伺えた。

校長先生、教頭先生のお話では、学校運営の資金不足がたびたび話題に上った。その理由として、クイーンズランド州政府からの資金が圧倒的に少ないことが指摘された。ニューサウスウェールズ、ヴィクトリア州などの他州では、**ESL** 専門の **High school** に対し、連邦政府からの資金に加え、それと同額の資金が州政府から出されるのであるが、クイーンズランド州政府は **25** 人分の教師の給与しか支給しないため、**Milpera** 高校は連邦政府からの資金のみに頼らざるを得ないからだという。**Adel Rice** 校長先生はクイーンズランド州のこの対応について、難民受け入れは連邦政府の方針であり、それに消極的なクイーンズランド州政府は **Milpera** 高校を「連邦」の管轄と見る意識があるからではないかと話した。

<授業見学、ボランティア体験>

私たちは **3 月 10 日（水）、17 日（水）** の **2** 日に渡って教室に入り込み、ボランティアとして生徒の手助けをする機会をいただいた。メンバーはそれぞれ別々な年齢、レベルのクラスに入り込んだ。以下は各自が体験した授業（**3 月 10 日**のもの）の観察メモである。

クラス 1（ビギナー）

年齢層 **16~19** 歳くらいの **Older Beginner** のクラス。午前中はクラスの半分が取り出しでライティングの指導を受けていたため **6** 人のみ（アフリカ系 **4** 人）で、午後は **9** 人ほど（ベトナム、中国、ソマリアなど）だった。

- ・ 算数：お金の数え方、数字の読み方と書き方を練習。コインを使って指定された値段を示す練習。基本的な生活能力だが生徒たちはかなり苦戦していた。ボランティアは **1** 人ずつに入っており、個別に生徒のタスクを手伝っていた。

- ・ 英語：'Before', 'after', 'between'の学習。アルファベットの順番を使いながらそれぞれの意味を理解する練習だったが、アルファベットの順番を覚えていない生徒が多く苦労していた。後半はリーディングで、ボランティア（筆者）、教師がほぼ1対1で付き添い、生徒が4, 5歳児向けの絵本を音読した。ある17歳くらいの女の子は同じ単語が繰り返されていてもなかなか読むことができなかった。記憶や学習能力の問題もあるだろうが、アルファベットもままならないレベルの生徒に対して、単語の意味や英語のスペリングと発音の関係をきちんと明示的に教えられているのか疑問に思った。
- ・ 午後ーアートセラピー：雑誌の写真をコラージュし、作品を入れるフォルダを作成。先生は生徒の作品に対しては非常によくほめていた。カウンセラーを兼任している先生で「怖い夢を見たらいつでも話しに来なさいね」と生徒たちに言っていた。コラージュに使われた雑誌が商業的、白人中心、男性の視点中心だったのが気になった。実際生徒の何人かが「アフリカの写真がないよ」と言っていたのが印象的だった。

クラス2 (ビギナー)

- ・ 自己紹介の仕方を「書く」練習。黒板に書かれた **Hello** の読み方などを考えさせたり、**My name is..., How are you?**などを写して読んだりする練習をしていた。指示は英語。
- ・ 午後は他の先生にもものを借りるアクティビティ。子どもの数は9人くらいでボランティアは2人だった。ボランティアの先生とメインの先生との関係がよく、ボランティアが自発的にサポートしている様子が見られた。

クラス3 (ビギナー)

- ・ パソコンルームで、ハーモニーデイに生徒を表彰するための **Award** カード作り。はじめに先生がスクリーンに映し出したモデルに従って各自作業をする。できる子はどんどん質問して進んでいくが、やる気のない子はそばについて一緒にやっただけでやろうとしないこともある。
- ・ モーニングティーをはさんで普通の教室に戻り、クラスで **Harmony day award** にふさわしい人を選ぶ活動をした。新しくきた子どももいるので黒板に自己紹介を書きながら一人ずつ順番に全員自己紹介した。途中でリーディング・プログラムのためなどに連れ出される子もあり、帰ってきてからは授業でやっていることがわからずついていけない場面も見られた。
- ・ 午後は算数：言語に焦点を当て、数式で示すものとそれを言葉ではどう表現したらいいのかを勉強していた。四則演算は取り混ぜていた。後半、本を読んだが(個人で同じ本を読む)内容は難しい。まず先生、次に個人、それから先生が内容確認のために簡単な質問をし、それをプリントに書いて表す。10個ぐらいの質問項目があったが半分ほどしかできなかった。スペルが難しそうに見えた。

クラス4

渡豪3ヶ月～6ヶ月。13名。英語力もかなり高い。事前に宿題として出していた本の中のスペリングを授業でディクテーションしていた。文法重視。文の認識、単語との違いに

生徒の意識を向けていた。ボランティアはいなかった。

クラス5

渡豪4～5ヶ月。リーディングの授業で音読を先生が聞く。内容はかなり難しい。その後、スペリングテスト。午後はプリントを使って、～どこにありますか？などの練習。書きが中心だった。全体的には、教室でのマナーが厳しいと感じた。また教室での授業と取り出して一対一の指導が繋がっていた。

— 報告者の感想および考察 —

短い間ではあったが、実際にボランティアとして教室に入り、生徒と接することで、すでに10代後半の生徒たちが鉛筆の持ち方、四則計算に苦戦していたり、授業に集中できず歌いだしたり泣き出したりする様子を見て、失われた教育の期間を取り戻すことの大変さを目の当たりにした。その一方でアートワークに集中し、独自のセンスを発揮する生徒や、そばに付き添って励ますことで意欲を見せる生徒を見て、教師やボランティアの姿勢として、生徒の力や可能性を信じることに、ひとつの側面で能力を測ってはならないことが大切だと感じた。

また、Milpera高校のボランティアの方々の献身的な姿勢や、専任教員との連携のよさなども、短い期間の間に垣間見ることができた。

しかしその一方で、日本にいたときにはわからなかった矛盾や疑問が見学後のディスカッションでできた。

<授業内容、指導方法について>

- ・ アクティビティと生徒の年齢のギャップに疑問を感じた（絵本の内容、お絵かきや数学の内容など）。しかし、その内容を理解するのにも困難な生徒が存在するので一概に年齢相当のアクティビティの方がいいとは言えないが、教師の生徒への接し方、教材の内容を、自己意識が発達した生徒に合わせて変えることができるのではないだろうか。
- ・ 個人作業の授業では、隣の生徒のノートをうつすだけの生徒もいた。
- ・ しつけ中心、適応教育を感じた。威圧的な態度をとる教師も見られた。
- ・ 生徒一人一人が十分に活きた学習を行えているかに疑問を感じた。
- ・ 使われる教材（写真、本の内容など）の選択において、多文化教育的な視点が欠けているように感じた。

<生徒について>

- ・ ESL教育と世界の紛争、経済情勢の密接なつながりを実感した。
- ・ 学習の面において年齢は重要な要素だと感じた。自己意識との関連。
- ・ グリーンスロープ小学校では、子どもたちがまだまだ伸びる可能性を感じたが、高学年のMilpera高校においては「この子達はこれから先、どうなるのだろう…」と考えざるを得なかった。これに対して教頭先生の回答は、最近では職業訓練とアカデミックの二

つの選択肢だけではなく、高校でもいろいろな職業の選択肢を見たり経験したりできるカリキュラムに変わっており、Milpera 高校の生徒たちにもオーストラリア社会で教育を受け仕事を得る可能性は十分あるということだった。また、もともとオーストラリアでの大学進学率は 10%くらいなので、仕事を得るうえで大学卒業資格がないことはそれほど大きな障害にはならないということだった。

<学校の運営、政府との関係について>

- ・ 難民の生徒はただで、一時居住あるいは学生ビザのアジア・白人系の生徒は授業料を払わないといけないことに疑問を感じるとともに、母国で教育を受けてきた生徒にとって、Milpera で扱う教科内容は簡単すぎて不満に感じられるだろう。
- ・ Milpera 高校への出資額の違いから、連邦政府と州政府の微妙な関係、そしてクイーンズランド州政府の保守的な態度を実感した。

Milpera 高校の見学から得た教訓は、私たちは教室の中で起こっていることを見ていたのでは不十分で、世界の情勢、学校運営のあり方、政策と政府の力関係など、幅広い文脈の中で言語教育とその活動を捉えていかなければならないということではないだろうか。

<参考>

Milpera State High School ホームページ (2004年4月10日現在)

<http://www.milperashs.qld.edu.au/contactus.htm>

報告者 山田裕子

アイアンサイド小学校 Ironside State School

訪問日 3月16日(水)

<学校概要>

- ・設立 1880年
- ・クィーンズランド州における8つの技術・算数・科学のセンター校の1つ
- ・40以上もの人種の違う子どもたちが一緒に勉強している
- ・主な教科領域：英語・算数・科学・LOTE・技術・芸術・保健体育・社会および環境に対する学習
- ・学年構成：1～7年生（5歳からPre-Schoolに入校可）
アフタースクールケアもあり
- ・その他：Japanese Study Tour Program、作文指導・音楽・科学の学習をより豊かにするためのキャンプやワークショップを実施

<ESLクラスについての報告>

全3コマ見学。先生はすべてダイアナ先生（ESLのベテラン先生）

1コマ目

- ・クラス編成：高学年生5人（ESLバンドスケール レベル5）
- ・授業テーマ：“Who was the greatest leader of 20th century?”
- ・授業のながれ：ガンジー、マーティン・ルーサー・キング、ネルソン・マンデラ3氏の中で、誰が一番偉大だと思うかについて話し合う授業。その際、ある評価基準を設けて、それぞれについて3氏を5段階で評価していく（評価シートを配布）。評価基準を何にするかは、児童との話し合いの中で決定する。児童からでた評価基準は「アイディア」「ストラテジー」「リーダーシップ」「エンパシー（共感）」「セルフ・サクリファイス（自己犠牲）」であった。その後、ガンジーの映画の一場面をビデオで視聴させ、その評価をシートに記入させた。子どもたちは知的な好奇心が高く、質問を先生にどんどんぶつけ、先生もどんな小さなことでもすべて答えていたことが印象深い授業。

2コマ目

- ・クラス編成：中学年生6人（バンドスケールレベル不明）
- ・授業テーマ：「粘土で自分の島をつくる」
- ・授業のながれ：自身でプランニングした自分の島を、粘土で実際につくってみる活動。それぞれの島には名前がつけられていた。方角や山・峡谷などについて、メインストーリーで学習しているのに関連付けて行われている。まずは小麦粉と塩、水を混ぜ、こねて粘土をつくることから開始。それをつかって、それぞれが空き箱の中に自分の島を作っていたのだが、途中なにかおもしろいことを思いついて、計画書とは随分違う島ができあがった子もいた。とにかく子どもたちは目をきらきらさせて作業を行い、先生は余計な口出しは一切せず、子どもたちの思うとおりに作業をさせていた。子どもたちはその作業のな

かで、自然なかたちで先生、友達との会話を楽しんでいる様子がみてとれた。先生の話すスピードは、1コマ目同様かなり速いが、こどもたちにとっては問題ないようであった。来週までに先生が、作った島をオーブンで焼いておくとのこと。「うまく焼けるかどうか」と先生は苦笑いをされていた。

3 コマ目

- ・クラス編成：高学年生 5 人（バンドスケールレベル不明）
- ・授業テーマ：「レインハットをつくる」
- ・授業のながれ：前回の授業までにどんな素材がレインハットに適しているか—耐水性（どんな風にテストをしたらよいかなども含む）、デザインなどは確認済み。皮革・ゴムなどの中で、レジヤシート素材が一番適しているということで、それをつかって実際の自分のレインハットを作ってみようという活動。レジヤシート素材できているショッピングバッグがそれぞれに配られ（1つ1ドル）、こどもたちは思い思いに作り始めた。どんな風につくったら立体的な帽子ができるというような説明は一切なし。こどもたちは試行錯誤しつつも、互いの帽子を見せ合い、時には笑い、時には感心しながら帽子をつくっていった。そして、それがどうみても帽子とはいえないような形でも、先生は決して否定することなく、すべて肯定。児童がたすけを求めたときのみ手助けをする。途中までは時間内に終わるのか不安だったが、なんとか全員作りおえた。来週、耐水性のテストをする予定（かぶらせて、上から水をかける模様。多分、こどもたちは大喜びだろう）。

— 報告者の感想および考察 —

今回、ESL のベテラン、アイディアの宝庫といわれるダイアナ先生の授業を 3 コマ見学させていただき一番感じたのは、決して気負うことなく自然体で、こどもの目線に立ってこどものすべてを受け入れる姿勢であった。日本の学校教育を見たとき、それは理想論であって、実現は難しいのではと考えていたのだが、オーストラリアの教育現場では、ダイアナ先生をはじめ他の先生がたにおいても、それがごく自然であたりまえのここのことなのである。そしてそれは、こどもが教育を受ける権利を持ち、一人一人が認められるべき存在であるということ、きちんと自覚し教育にあたっていらっしゃるからなのではと考えられる。こどもたちの年齢に即した教材をつかって、こどもたちの興味をひきつけ、無理に話させることなく自然な発話を導き出す。これらは、ESL の先生として、ダイ先生が長年培ってきたものに基づくものなのであろう。また、ESL の授業でありながら、「英語を教えるのではない英語教育」の本質を見た気がした。

今回の授業を、日本での JSL 教育にどう生かすかを考えた場合、上記にあげたような「日本語を教えるのではない日本語教育」の視点、つまりは教科教育だけにとらわれない教育支援のあり方も考えていくべきなのではないかと考える。こどもの目線に立ち、こどもが知的好奇心をくすぐられるような教育支援の方法を模索していかなければならないと感じた。

報告者 森沢小百合

トゥーウォン・カレッジ Toowong College S.S.E.

訪問日 3月19日(金)

<学校概要>

- ・設立後、約 30 年
- ・生徒数：約 300 名
- ・学年構成：9～12 年生（一学年 2～3 クラス）
- ・大人のためのクラスも開講
- ・制服あり

<ESL のクラスについて>

- ・クラスのほとんどがミルペラからの生徒
- ・ESL クラス—2 クラス（年齢で分ける。ジュニア/シニア）
- ・ESL クラスの目的—高校で成功するための **intensive academic English** を習得させ、メインストリームへ移行させていく（メインストリームで 2 年以上在籍しないと大学受験の資格がもらえない）
- ・授業の内容—4 技能に集中したもの。主に「書く」「読む」に力を入れているが、生徒の習熟度に応じて「聞く」「話す」を集中的に行う場合もある。内容重視のアカデミック英語（サイエンス・ソーシャルサイエンス・音楽・英語など）。他の学校に移ったときのことを考えて（一般のハイスクールでは、文学作品を中心とした伝統的文法重視の英語教育がおこなわれている）、文法的正確さを訓練するための授業もある。
- ・ESL 終了後、10 年生か 11 年生に編入
- ・ESL のスタッフ：フルタイム 2 名、パートタイム 2 名

<ESL バンドスケールについて>

- ・取り扱いかた：メインストリームに移すとき、あるいは生徒が他の学校に移るとき、その学校の ESL に先生に生徒のレベルを伝えるときにつかう。メインストリームに移る時の基準は、レベル 5 としているが、実際は四技能を平均させると 3 から 4 レベルくらいになってしまう（生徒によって四技能のレベルがまちまち—アフリカからの生徒は「話す—5 レベル」でも「書く—2 レベル」になってしまったりする）
- ・メインストリームの先生は、バンドスケールについての知識がないため、バンドスケールをつかって生徒の様子を説明するのは難しい
- ・「～ができない」という基準は欠陥モデルであり、バンドスケールの「～ができる」と評価していく背景哲学は評価できる
- ・通常生徒の言語能力を図る際使用するのは、「デルタテスト」。生徒一人に対し、先生が複数でおこなうため、判定がわかれることもあり、むずかしい
- ・アセスメントアクティビティをつかってはかることもある（科学などははかりやすい）

<ESLクラスについての報告> 全3コマ見学

1コマ目

- ・クラス編成：ジュニアクラス 15人
- ・授業のテーマ：ある説明文から必要な情報を読み取り、PCをつかって表にまとめる
- ・授業のながれ：1月から12月までの月の名前が、古代ローマ時代の史実にもとづいているという内容が書かれた説明文の中から、それぞれの月の由来を読み取って分類し、PC上の表にまとめていく作業。歴史の内容把握とPC操作の2技能を使う能力育成となっていた。先生は生徒が助けを求めたときのみ、手助けする。「書く」「読む」に限定された授業。使われていた文が生徒の興味をひくものであったこともポイントが高い。

2コマ目

- ・クラス編成：ジュニアクラス 15人
- ・授業のテーマ：リサーチ（本やインターネットからリソースをもってきて、レポートとしてまとめる）
- ・授業のながれ：与えられたテーマは「古代ローマ」。この時代のファッション・戦い・神様・建物などのなかから好きなトピックを選び、本やインターネットから情報をあつめ、自分なりにレポートをまとめる。このように、まず調査をし、その後口頭発表およびレポート作成というかたちの課題は、オーストラリアのハイスクールではよくおこなわれるので、それを意識しているものと考えられる。同時に、参考文献の書き方やレポートの書き方などの指導もおこなわれていた。1コマ目同様「読む」「書く」重視の授業。

3コマ目

前半

- ・クラス編成：ジュニアクラス 15人
- ・授業のテーマ：「ニュースを聞く」
- ・授業のながれ：生のニュース番組の一部を録画したものをつかって（「サイクロン」についてのもの）、ニュースを聞き取る能力を養おうとするもの。「メインストリームでは1回だけしかみせないけど、ここでは2回みせます」といっていたので、メインストリームでつかう教材を、聞かせる回数は増やすもののそのまま使用している。あらかじめ内容把握のための質問をいくつか板書し、生徒はその質問に答えられるようにニュースを聞き取っていく。生のニュース番組から取っているだけに、スピード・内容共に高度であるにもかかわらず、生徒たちは質問に的確に答えていた。ニュースの長さも聞くのにちょうどよい長さで、内容もおもしろかった。

後半

- ・クラス編成：シニアクラス 16人（1/3 アフリカ系、1/3 中国系、1/3 グreek・アラブ系）

- ・授業テーマ：生教材（ホテルのキャンペーン案内）を使って、文の内容把握をはかる
- ・授業の流れ：「ホテル・ハイアットリージェンシー」のパッケージプランがかかれた案内の紙を生徒それぞれにくばり、そのプランがいつからいつまでで、どんな部屋に適応して、値段はいくらなのかなどの質問を、口頭で言いながら **OHP** でも写し、答えさせていくもの。全体的に女の子が活発に発言していたのが印象的。

その他、報告者が見学しなかったクラスからの報告

- ・シニアクラスでは、医学の話題で、西洋医学と東洋医学の比較であったが、西洋の医学を使うのは **orthodox**(正統派)、東洋のそれは **alternative** (代替りの) **conventional** (因習的な) というように、完全に西洋の視点で書かれたテキストであった（西洋が本来的で東洋の針や薬は非主流的と言ったように）。生徒の中にはアジアの生徒もいたので、西洋中心のテキストを使うのはどうか。「これは、西洋的見方ですね」の一言と、多文化的視点の教育、また違う視点を取り込んだテキストをどう組み立てるかなどの検討が必要と思われる。
- ・「あなたの国では、男の先生と女の先生どちらが多いですか」の質問から、生徒の意見をきき、実はオーストラリアでは女の先生が圧倒的に多く、いま男の先生を増やすキャンペーンをおこなっている、みんなが政策決定者ならどうするか。これを導入にそれについてのニュース番組をみせた。興味を引きつけてからのうまい導入法。

— 報告者の感想および考察 —

ESL クラスのほとんどがミルペラからの生徒だということだったのだが、ミルペラで見た「適応指導」の状態から考えると、生徒自身が随分落ち着いて「授業を受ける姿勢」が整っていたように感じた。アフリカ系の子どもたちも多かったが、読み書きの面も特に問題があったようには思えない（他の国からきている子どもに比べての意味）。オーストラリアに来る前に学校教育を受けていなかった場合でも、来豪時に小学校に属するくらいの年齢なら、ある程度まで短期間に言語能力を引き上げることが可能なのであろうか。**ESL** の授業全体が、まさにメインストリームを意識して行われており、「読む」「書く」重視、内容についても同じ教材を使ったりと、メインストリームでの授業がきちんと理解できるよう計画されていた。

ハイスクールでの **ESL** 授業の場合、やはり教科教育との関連、「読む」「書く」能力の強化ははずせないものであるが、生徒の興味や関心と指導教材が合致しなければ、生徒の言語能力を引き上げるのは難しいのではと考えられる。その意味で当校/**Toowong college S.S.E.U** では、生徒が前向きに、楽しんで授業に取り組んでいた様子が見て取れた。ただ、シニアとジュニアの年齢別 **2** クラス構成になっており、**1** クラス約 **15** 人の生徒のレベルがまちまちなので、理解できていない生徒のフォローをどのようにおこなっているのか疑問である。また、**ESL** のバーバラ先生が最後に「家庭で母語を話すから英語が伸びない」、つまり「母語教育は必要ない」というような発言をされており、オーストラリアでは「母語の必要性」について、どの程度の認識があるのか疑問が残った。

今回の学校見学から **JSL** 教育に生かせる点をあげるならば、「メインストリームの授業内容を軸としながらも、さらに生徒の興味関心を引くような指導教材をつかって四技能を活性化させる」といったところだろうか。

報告者 森沢小百合

アイアンサイド小学校 Ironside State School 日本語クラス見学

訪問日 3月16日(水)

<日本語クラスの概要>

- ・ Ironside では3年生から日本語のクラスがあり、それはQLDでもまれなケースである
- ・ 教師…5年間日本でALTとして働いた経験をもつ女性教師が全クラスを担当
- ・ 一クラス40人前後
- ・ QLDではローマ字使用が禁止されているため、基本的に板書、配布プリントなどひらがなが使用される
- ・ 授業中の指示は日本語と英語
- ・ 特に教科書はなく、教師が自分で授業を構成したり教材を用意したりしていた

日本語クラスを6年生・7年生・5年生の順で3クラス見学し、部分的にクラスに参加した。

<日本語クラス6年生>

- ・ 挨拶の歌を歌う
 - ・ 動詞のジェスチャー&単語の確認
 - ・ 「(〇〇曜日に) なにをしますか」についての授業。以下その展開
1. 何曜日に誰が何をしたかについて日本語で歌われた歌をきいて内容を書き取るタスク
 - ① 3色のペンを用意(一回目に聞き取ったこと、二回目に聞き取ったことを色分けして書き取らせるため)し、一回聞いたところで聞き取った内容を確認
 - ② 絵を使って歌に出てくる家族のメンバーを確認
 - ③ 二回目の聞き取りと内容確認
 - ④ あまり正解がでてこないと、家族のメンバーとその行動が書かれた紙を見せ、誰が何をしたかを結びつける活動を行った
 2. 一週間の予定を質問しあう活動
 - ① 一週間の予定が書いてあるシートを配布
 - ② 内容を確認し、ペアで「〇〇曜日になにをしますか」を質問しあう
 - ③ みんな違う予定が書かれたシートを新たに配り、自分と同じ曜日に同じことをする人を探すサーベイを行った。その際、見学者も参加

感想：今回の活動では、「一週間の予定」の予定の部分はすべて教師が考えたものだったので、児童の本当の予定や児童がやりたいことなどを実際に考えさせるなど、児童が実際に表現したいと思う内容に近づけることができれば、「自分の伝えたいことを伝える」ということば本来の姿に近づき、ことばの定着や学習意欲も増すのではないかと感じた。

<日本語クラス7年生(途中参加)>

- ・ 「〇〇があります」の構文の授業 展開は以下の通り

- ① 黒板に大きな家といろいろな部屋の絵がはってあり、それを使って確認
- ② 「寝室はいくつありますか(英語で)」の問いから、助数詞「ひとつ〜とう」までの数え方をしっかり確認
- ③ 「しんしつがいくつありますか(英語)」の日本語での言い方を児童に考えさせるはじめ、「しんしついくつ」「しんしついくつか」などと言っていたが、なんとか「しんしつがいくつありますか(正解)」にたどり着く
- ④ 「〜がいくつありますか」の定着のため、訪問者にいろいろな部屋のカードを配り、児童が訪問者に各部屋の数を尋ねる活動を行った

感想：黒板にはってあった大きな家の絵や名前のシールなどの大きさは、クラスの後ろの席から見るとは少し小さすぎたように感じた。一クラス 40 人前後と語学のクラスにしては大きなクラスであるので、すべての児童が見えるように教材などを作成する必要があると感じた。教師が作成したすてきな教材だっただけにとってももったいなかった。

<日本語クラス 5 年生>

- ・ 前回学習した「〜から来ました」「〜人です」「〜を食べます」「〜に住んでいます」の確認と定着のための活動 展開は以下の通り
 - ① グループごとに上記の設定の絵カードセットが配られ、グループでその絵にあったフレーズの練習
 - ② みんなの前でグループごとに発表
 - ③ 各グループの発表内容を教師と一緒に確認
- ・ 食材の名前を覚える活動
 - ① すしの絵と材料、作り方が書かれたスライドを見せそれが何かを確認（すしのレシピ）
 - ② 材料ということばを確認した後、いろいろな食材が書かれた紙を配り、その名前を英語と日本語で確認
 - ③ グループに分かれ訪問者が日本語で食材の名前を読み上げ児童が英語で答える作業

感想：「〜からきました」「〜人です」「〜を食べます」「〜に住んでいます」の四つの構文の中で「〜を食べます」だけが種を異にしているように感じた。この四つの文の中で「〜を食べます」という表現は「〜人だから〜を食べる」というようなステレオタイプの感じを受けた。何を意図して「〜を食べます」の文を他の文と一緒に扱ったのかはわからないが、別の課で扱ったほうが良かったのではないかと感じた。自分が普段食べるものと関連付け、身近な食べ物と自分の生活にあった表現として取り入れることができると感じた。

一 日本語のクラス全体に関する感想および考察 一

すべての授業とも児童を楽しませるための工夫が盛り込まれていた（正解したときに「ピンポン」となるおもちゃや音楽を取り入れた授業など）。また、教師が作成した教材や配布物は絵がふんだんに盛り込まれ、児童の興味を引くものであった。

授業は小学生ということもあり細かい文法を教えるというより、場面シラバスの構成になっており、それぞれの場面に必要な構文を教えるといった感じであった。教科書はないので、教師は板書やポスター、配布プリントを用いていた。児童が、教師が板書したものを書き写すような場面は少なかった。QLD では日本語の授業でローマ字表記を用いることは禁止されているため、板書はすべてひらがな表記であったが、まだひらがなが定着していないようで、答えが黒板に書いてあっても答えられ児童が多くいた。この日本語クラスでは日本語での読み書きよりはむしろ日本語で話せることに重点を置いているように感じられたが、ひらがなが定着していない状況でひらがなによる板書やプリントを配布しても、その場ではなんとか覚えたことも、あとで忘れて思い出そうとしたときに自分で復習する時に、それが有効な復習の材料になるかという点と難しいのではないかと感じた。

また、授業中、構文を覚えるためだけの単調な練習や、実際とはかけ離れた設定が目に付いた。「～はいくつありますか」という問いに対し、「食堂がいくつかあります」という答え（6年生のクラス）や「私はイタリアから来ました。イタリア人です。ピザを食べます。ブリスベンに住んでいます」など、ステレオタイプの内容をただ暗記して発表するだけの活動（4年生のクラス）など。語学である以上、実際の使用場面を意識したものである必要があるのではないかと感じた。

今回、媒介語を用いた語学のクラスの難しさを感じました。授業中の指示は日本語と英語でなされたが、日本語の指示の後に必ず英語の指示があるとわかっている児童は、意識的にも無意識的にも日本語の指示をあまり熱心には聴いておらず、かといって、日本語だけで指示をしても教師の意図はなかなか伝わらない。

とはいっても、小学校レベルにおける外国語教育では、その外国語をマスターするというよりは、その言語およびその言語が話されている国に対する興味を引かせ、自分の国以外に目を向け他の国、英語以外の言語の存在にきづくことが目的であるのであれば、それは十分に達成していたように感じる。

報告者 武蔵祐子

クイーンズランド大学 University of Queensland 大学における日本語クラス

訪問日 3月12日(木)

<クラスの概要>

- ・ 中級クラス
- ・ 教師…1名(日本語ネイティブ 女性)
- ・ 学生…10名(この時は、授業選択期間)
日本語の主専攻は少なく、ほとんどが副専攻としている学生
- ・ 使用言語…日本語(難しい単語や指示には英語を使用する。)

<授業概要>

① ディスカッション(1時間、見学者とともにグループ活動) 『日本語学習アンケート』

- ・ 教師がハンドアウト(『日本語学習アンケート』)を配り、活動を説明。

(板書)

アンケート

- 1) 漢字の読み方
- 2) 文の意味
- 3) 自分のこたえを✓
- 4) インタビュー 「どうしてそう思いますか。」
りゆうをきく 「どうしてですか。」

- ・ 見学者1名に対し、学生が2名ほどのグループに分かれる。
- ・ 漢字の読み方と文の意味を確認する。(見学者が学生に説明する。)
- ・ アンケートにしたがって、自分の答えをチェックする。
- ・ アンケートの項目ごとに互いにインタビューする。 学生→見学者 見学者→学生
「どうしてですか？」

② 見学者が学生に日本語上達のポイントのアドバイスする。

③ テスト(1時間) (※ 見学者は退室したため見学なし。)

<配布プリントについて>

- ・ 『日本語学習アンケート』…学習に対する15項目の質問事項があり、1…ほんとうに
そう思う ～ 5…ぜんぜんそう思わない の程度を選ぶもの。
- ・ 漢字仮名混じり文であり、振り仮名はない。
- ・ 難しいと思われる単語には英語が書かれている。
- ・ 活動についての説明が英語で補足されている。

<漢字学習について>

- ・ 教育漢字を学習することを目指している。
- ・ 毎週10～20問の漢字テストがある。
- ・ 授業時間外に単語の練習などを行う学生もいる。

— 報告者の感想および考察 —

選択して来た学生だけあって、日本語を学習する意識が高いと感じた。インタビューでは積極的に話す学生が多く、自分対相手という話し合いの基本姿勢が出来あがっていた。これはこのクラスだけのものではなく、オーストラリアの学校で過ごしてきた学生の持つ学習に対する意識の現われだろう。

また、今回の議題のように、自分自身が日本語の学習者であり、その学習姿勢や、学習方法、上達に関する考え方を問う問題は、学生の意欲を高めるものであると感じた。学生によって、考え方はさまざまであり、例えば、日本に行ったことがある学生は母語を使用しない学習を希望し、反対に行ったことのない学生は母語を使う学習を希望したペアもあった。

この活動の目的は、相手を説得させるわけでも、どちらが正しいか決めるというわけでもない。日本語の母語話者である我々に向かって、自分の考えを日本語で伝えること、相手の考えと自分の考えが違うことを知ること、また、これからの日本語学習に向けての動機付けという面が強かったのではないだろうか。30分以上、グループでの会話が途切れず、見学者として参加した側も、もう少し話していたいという気持ちにさせられるほど、相手のことを知るということに関して好奇心を持てるクラスであった。

このように、自分の考えを臆することなく伝えられるという姿勢を持った学生を育てていくことが、年少者日本語教育でも重要なことであろう。年齢を重ねたから急にそのような姿勢が生まれるということはない。小さなうちから経験を積み、自分の頭で考えるという作業を繰り返すことで鍛えられていくのだと思う。今回のような活動を年少者日本語教育にどのように応用できるのか考えていきたい。

報告者 小池愛

クイーンズランド大学 University of Queensland 大学における日本語クラス

訪問日 3月19日(木)

<クラス概要>

- ・ 上級クラス
- ・ 教師…1名(日本語ネイティブ 女性)
- ・ 学生…11名(全員が日本滞在経験あり)
- ・ 使用言語…日本語

<授業概要>

1時間 50分の授業のうち始めの1時間は文法の授業ということで見学なく、後半50分を見学。

② 見学者、学生の自己紹介

③ 「漢字は廃止すべきである」についてのディベート

- ・ 授業アンケートの漢字は重要かどうかについての項目で、学生の意見が二つに割れたため教師がこのテーマを設定
- ・ 学生11名と見学者5名が1グループ4名の4グループに分かれた。うち、2グループが賛成派、2グループが反対派。(各グループに必ず1名は日本人がはいった。)
- ・ グループが賛成派か反対派は教師が決定
- ・ 賛成派・否定派のそれぞれにどのような主張をすればよいかのヒントが4～5例書かれた紙を配布
- ・ 各グループどのような主張をするか、またどのような順で発表するかを決定
- ・ ディベートの流れは以下の通り(OHPにて提示)

ステップ1. 立論(Opening Speech) / 肯定派・否定派 各グループ1名2分発表

ステップ2. 反対尋問(Re-battle) / 肯定派・否定派 希望者が挙手にて

ステップ3. 作戦タイム(Planning Time) 5分

ステップ4. 最終弁論(Final Speech) / 肯定派・否定派 各グループ1名2分発表

- ・ 立論・最終弁論は学生が発表

— 報告者の感想および考察 —

この授業を受講している学生全員が日本に滞在した経験をもっていることもあり、日本語や日本に対する関心は高く、学習意欲もとても高いように感じられた。その反面、日本語で話す力には幾分差があるようにも感じられた。

ディベートのテーマが「漢字は廃止すべきである」であったが、このクラスの学生の多くは漢字が好きで、漢字が重要だと考えていたようで、賛成派に回った学生はなかなか苦戦していた。またディベート中は、学生同士が活発に意見をぶつけ合っていたが、「漢字は

廃止すべきである」というのが、「日本語学習者にとって」であるのか、「日本語において」であるのか、賛成派・反対派が焦点をあてた部分がずれていたため、議論がうまくかみ合わない部分も見られた。そのような意味では、テーマの設定に少し無理があったように感じられる。賛否がもう少し分かれるようなテーマ設定、もしくは大学生であるので、学生自らがテーマを設定しディベートを行う形にすればより学生が学習意欲を持って取り組める授業となったのではないかと思う。

今回の授業では、学生の発言や言おうとしている内容をどのように訂正したり、言い換えたりしてあげるかという、その訂正の仕方、タイミングの難しさを改めて感じた。特に学生が言いたいと思っていることを言い換える場合、学生が言おうとしていることと言い換えたことが微妙にずれていることもあり、言い換えをどのように行うかがとくに難しいと感じた。今回のディベートの授業では意見が交互に飛び出し、なかなかその都度流れをとめて訂正したり、言わんとしていることの真意を確認したりしていくことは難しかったが、自分が学習者と接する場面で、「これは～っていうことでしょう」と自分の解釈を押し付けていなかったかと反省させられた。日本語学習者は自分の考えとことばがうまく結びつかない中で必死に自分の意見を表現しようとしており、言いたいことと自分が言ったことがずれてしまうということもしばしば起こりうる。そのときに本人が考えていることとことばを近づけるためにどのような手伝いができるのか深く考えさせられた。

報告者 武蔵祐子

クイーンズランド日本語補習授業校ブリスベン校

訪問日 3月13日(土)

クイーンズランド補習校はブリスベン日本人会とゴールド・コースト日本人会の2つの設置母体を持っている。今回訪問したのはブリスベン校で、文部科学省派遣の校長と日本人会や保護者会の代表者が運営委員となり、毎週土曜に **Indooroopilly State High School** の校舎を借りて授業を行っている。授業時間、科目、生徒児童については以下の通り。

授業時間	授業科目
① 登校 8時45分	小学部…国語、算数
② 朝の集会 8時50分～9時5分	中学部…国語、数学
③ 第1時限 9時10分～9時50分	幼稚部…日本語(数遊び、歌も含む)、 小学校1年への準備
④ 第2時限 9時55分～10時35分	
⑤ 休憩 10時35分～10時55分	
⑥ 第3時限 10時55分～11時35分	児童生徒
⑦ 第4時限 11時40分～12時20分	約140名(3月現在)

<見学内容>

(1) 朝礼

卒業式に備えて国歌(オーストラリア国歌、日本国歌)、蛍の光の歌の練習を行い、その後日本に帰国する先生のあいさつを行ってから、賞状授与があった。

(2) 学校・クラス

授業中の様子

- ・ 常に親や訪問者がクラスを見学できるよう、教室のドアは常に開いている。児童生徒は訪問者の存在に意識している様子はあまり見られなかった。
- ・ ボランティアのアシスタントは小1(1-1、1-2)のクラスに一人ずついて、授業についていけない子につきっきりで見守っていた。
- ・ 小4のクラスでは子どもたちがよく手を上げ発言していた。しかし、日本語のわからない児童は参加できず、先生が見ていないところで英語を使用していた。先生がタスクを出し児童がその作業をしているときに、日本語がわからない児童のところに行って先生が一对一で説明をしていた。
- ・ 小1の授業でプリントを回収するときに、先生が「あと30数えたら集めるよ」といって、児童に数を30まで数えさせていた。数字を覚えるのに有効な練習。

休み時間の様子

- ・ 授業終了のチャイムは先生がベルを鳴らしに回る。
- ・ 小1の女の子たちと先生は、休み時間に床に座って自作のひらがなカルタをしていた。

- ・ 休み時間はほとんどの児童が校庭で遊んでいた。生徒の多くは教室で勉強していた。大半の児童は英語を話していた。児童の方は話す言葉で遊び相手も分かれているよう。

その他

- ・ 年間学習計画があり、それに基づいて授業が行われている。教科書は、東京書籍を使用。
- ・ 見学当日は授業最終日だったらしく文集が配られていた。次週は卒業式と終了式が行われるそう。
- ・ 各クラスの机の並び方は様々で、グループのように分かれ黒板を向いていない座り方をしているクラスや、前を向いて机がきれいにならんでいるクラス、また、男女が分かれて座っているクラスから、男女が混ざって座っているクラス、そして白人系と日本人系に分けて座っているクラスもあった。一貫せず教師にゆだねられているよう。
- ・ 職員室では、保護者が日本から届いた本の整理をしていた。毎週図書やビデオを子どもに貸し出ししている。

— 報告者の感想および考察 —

日直や朝礼など日本の学校らしい文化と、授業中飲み物を飲んでいいといった日本にはまれな学校文化が合わさっているところが、海外の補習校らしさを物語っていたように感じる。様々な言語や生活習慣を持った子どもたちが多く、日本語のレベルの違う子どもたちへの一斉授業の難しさを改めて実感した。特に印象的であったのが、4年生の授業では、「ごんぎつね」を子どもがひとりひとり音読していたが、ある子は感情をこめながら読み、ある子は文字を読むので精一杯だったことである。また、自分の意見を前に出て発表する機会があったが話す内容も明らかに差が出ていた。週に一回という限られた中で、教師に任される部分が多くあるように感じた。その中で教師一人一人が様々な方法で授業を模索しているのが伝わってきた。宿題は多めに出されていた。

また、日本での国語の文章問題で JSL 児童が日本特有の解釈に理解できず悩まされることをこの補習校でも感じた。中3の授業では、国語の試験（鳥取の高校入試問題）の答え合わせをしていた。先生が答えを説明していたが、その時に生徒はよく発言し反論していた。生徒が日本特有の解釈による選択問題があり、答えが納得できないと先生に言うと、「どうしてそう思ったの？」と先生は生徒に話を聞いた。そして、先生は「そうか」と相槌を打ってから、「この問題はよくないけど、答えはウじゃなくてイになるのよ。」と言った。そこで生徒はしばらくして「ま、いっか」と言って妥協した。これが、国語における日本特有の解釈における問題点であるのではないかと思った。

週一回という限られた授業、教師の工夫、そして国語の文章問題のあり方について考えさせられる貴重な見学であった。

報告者 坂田麗子

LOTE センター (訪問 2 回目)

見学日 3/15 (月) 4:00~5:00

クイーンズランド州で LOTE(Language Other Than English)は6 - 8 年生の必修科目であり、日本語はクイーンズランド州推奨 7 言語 (日本語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、インドネシア語、中国語、韓国語) の中でも学習者数が多い。今回訪問したクイーンズランド LOTE センターには上記 7 言語のうち 6 言語のアドバイザーが所属している。LOTE センターには LOTE 教育の図書館が併設され、日本語に関するものとしては、一般書籍やテープ・ビデオ、日本の小中学校の教科書、書道道具や浴衣、レストランの食品見本などの実物教材、これまでにアドバイザーたちが開発した教材や資料セットなどが豊富に取り揃えてある。これらを日本語教師に貸し出しできる仕組みになっている。今回の LOTE センターの訪問ではこの図書館を見学させていただき、また日本語アドバイザーの北井佐枝子さんのお話を伺うことができた。北井さんは 2003 年に国際交流基金の派遣でブリスベンへ。その前はメルボルンで日本語アドバイザーを務めている。教師の一般的な日本語能力向上の業務を中心に行っており、教師研修の実施とネットワークの促進を目的として、クイーンズランド州の LOTE 教師の情報源としてのウェブサイトの立ち上げにも関わっている。

北井先生のお話

- ・ クイーンズランドの LOTE の先生は 300~500 人くらい。
- ・ 英語で日本語を教えているが、日本語も英語も両方きちんと使える人はほぼいない。
- ・ 日本語の先生は専任でもいろんな学校を回っているので、とくていの所属意識が持ちづらい。
- ・ 資金面の問題で研修を余りできないのが現状。また、クイーンズランドは広いので研修の人集めも大変である。結局、個別対応や通信教育で対応することになる。
- ・ NALSAS がなくなってから LOTE センター自体が縮小化している。
- ・ LOTE センターは、教師や興味がある人が利用できるが、教材の貸し出しについては教師に限られる。貸す際は LOTE が送料をもち返却の際は相手を持つ。
- ・ 日本語教育のシラバスに沿ったカリキュラムを各学校で作らなければならなくなった。特定のテキストに沿ってやってはいけない。いろいろな教科書を持ってきたりしなければならぬため、教師の負担はかなり大きい。

感想および考察

図書館の膨大な資料に驚いた。こんなにも教材があり、貸し出しの設備も整っているのなら様々な形で活用できると思った。しかし、教材をうまく活用するかは LOTE センターではなく、各 LOTE 教師に任されているわけで、その教師育成の困難を目のあた

りにした気がした。また膨大の教材も目的に合ったものでなければ意味がないわけで、資料を活用していくという意味を改めて考えさせられた。このような **LOTE** センターや図書館を日本でも設置する必要性を感じるとともに、それにともなった質や内容も整える必要があると感じた。

報告者 坂田麗子

編集後記

本研修に参加した我々は、「早稲田こども日本語クラブ（わにっ子クラブ）」の活動として新宿区内の小・中学校、幼稚園で JSL 児童の日本語支援・教科支援を行っている。その日々の活動の中で、JSL 児童生徒の日本語力の把握の問題、担任教師の連携の問題、日本語支援と教科支援のバランスの問題、とさまざまな問題を抱え、仲間同士、情報や問題を共有し、より良い支援を行うための話し合いを重ねてきた。

年少者日本語教育研究室で研究を続けてきたオーストラリアにおける移民の子どもたちを対象とした第2言語としての英語教育（ESL）も、我々が JSL 児童の支援にあたる際の一つの拠り所としてきた。今回、その学校現場を実際に視察したことで、文献からだけでは窺い知ることができなかった貴重な「生の声・生の情報」を得ることができた。

本報告書の各報告の考察に見られるように、我々は「オーストラリアの ESL および JFL を検証する」ことで、JSL を新たな視点から捉えなおすことができた。これを本研修の大きな成果としここに記したい。

本研修中、我々の訪問を歓迎し我々の質問にも熱心に受け答えてくださった、各学校・学校関係者の方々にここで改めて御礼申し上げたい。

本報告書執筆者一覧

森沢小百合	(日本語教育研究科 修士課程 1 年)
小池 愛	(日本語教育研究科 修士課程 2 年)
坂田麗子	(日本語教育研究科 修士課程 2 年)
武蔵祐子	(日本語教育研究科 修士課程 2 年)
山田裕子	(日本語教育研究科 修士課程 2 年 クイーンズランド大学留学中)
川上郁雄	(日本語教育研究科 教授)

注：在籍学年は 2004 年 4 月現在

発行 : 早稲田大学大学院日本語教育研究科
年少者日本語教育研究室
代表 : 川上郁雄
発行日 : 2004 年 4 月 15 日
編集 : わにっ子クラブ